

ミニ内航海運史 IV 水軍 2

(3) 近世の水軍

戦国時代から江戸時代にかけて水軍は天下統一の渦の中に巻き込まれ、新たな転機を迎えることとなる。織田信長は長島一向一揆征伐や石山本願寺掃討に際し、志摩の守護・九鬼氏出身の九鬼嘉隆（くき・よしたか）を従属させて水軍を編成した。その統制権は信長の死後、豊臣秀吉に引き継がれたが、秀吉はさらに淡路や四国の沿海部の領主として子飼いの仙石秀久、小西行長、加藤嘉明、脇坂安治らの武将を送り込み、それぞれに水軍を編成させて九州征伐や小田原征伐に参戦させている。

秀吉はまた、九州征伐の翌1588年に海賊禁止令を発布し、海賊衆の財源であった通過商船の有償警護などの活動を海賊行為として禁圧、海上の土豪たちに領主の支配に服することを命じた。この命令以降、村上水軍の能島氏は毛利氏の家臣となって毛利水軍を率いることになり、秀吉に直接服属した来島氏は秀吉直属の大名に取り立てられて豊臣氏のための水軍を命ぜられるなど、かつての海賊衆たちは大名権力の水軍に再編を強制された。こうして編成された豊臣政権の水軍は、1592年に始まる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に大々的に投入されることになる。

豊臣家に代って幕府を開いた徳川家康は、海外進出に消極的で大船建造の禁令を発し、諸大名に軍艦の建造を禁じて、来島氏を豊後森に、九鬼氏を摂津三田にと、水軍大名を次々内陸に移して海事から切り離させた。家康自身は今川氏、武田氏の水軍を継承して向井氏、小浜氏、千賀氏、間宮氏から成る徳川水軍を編成したが、江戸への移封後は彼らを関東に随行して、そのまま江戸幕府の水軍とした。幕府水軍の拠点は三浦半島の浦賀と江戸の日本橋河岸に設けられ、1631年に建造した櫓（ろ）100挺、水手（かこ）200人、米1万俵を積載する將軍御座船『安宅丸』（あたけまる）を初めとする巨船を擁した。しかし、やがて鎖国の時代の到来とともに幕府艦隊も縮小され、老朽化した『安宅丸』も解体されて、本格的な水軍は日本から消滅していった。

戦国時代後期から江戸時代初期の大名が編成した水軍では、数十人から数百人が乗り組む安宅船（あたけぶね）と呼ばれる巨船が配備され、巨船同士の大規模な海戦も行われるようになる。安宅船などの日本の水軍の軍船は竜骨を持たない和船の一種であるが、楯板で厳重な防備が施され、大鉄砲や大砲など強力な武装が取り付けられるようになった。その代表的なものは織田信長が九鬼嘉隆に命じて建造させた鉄甲船（鉄板で装甲した巨大安宅船）である。

江戸時代には、幕府や海辺に領地を持つ大名が船手（ふなて）組、船手方、船手衆などと呼ばれる水軍を抱え、幕府では向井氏、長州藩では能島氏、尾張藩では千賀氏のように、かつての海賊衆の末裔たちが世襲して維持した。しかし、彼らの役割は戦争の絶えて久しい平和な時代にあって、領内の海上交通を管理したり、領内巡察や参勤交代などで大名が船旅するときに船を出す程度の役割しかなかった。

幕末になると欧米諸国を範に幕府や雄藩は、近代的な艦隊の創設に取り組むが、そのときにはすでに海軍という用語が用いられ、水軍の名は過去のものとなる。しかし、幕末の海軍創生期には、水夫達のかなりの人員が水軍の伝統ある地方の出身であった。

海御座船
(写真提供：船の科学館)

